

ベルクソン「意識の諸平面」概念の心理学的背景

木山 裕登

1. 導入

非延長と延長、量と質、自由と必然の対立、そして精神と物質の関係という伝統的な問題を扱う『物質と記憶』には、その問題に適切に取り組むための「イメージ」「純粹知覚」「純粹記憶」といった様々な概念がちりばめられているが、その根本にあるのはただひとつである。それが「意識の諸平面」概念に他ならない。二種類の序文は共にそのことを示している。「我々の仕事の出発点となったのは本書第三章の分析である。我々はその章で、記憶の精確な実例に基づいて、精神の同じ現象が、多様な異なる意識の諸平面に同時に関与しており、それらは夢と行動との中間的諸段階の全てを示している、ということを示す（初版への序文、MM444¹）。「我々の心的生の異なる調子（tons）があり、我々の心理学的生は異なる高さで、即ち、我々の生への注意に応じてあるときは行動により近く、あるときはより遠くで、働くことができる。それこそが、本書の指導理念のひとつであり、我々の仕事の出発点とさえなった」（第七版への序文、MM7）²。

しかし、このように言われるにも関わらず、「意識の諸平面」概念そのものの説明は少ない³。ところで、ベルクソンが心理学の文献を大量に指示しつつ議論していることから想像できる通り、彼の議論はゼロから発明されたのではなく、当時の心理学的議論をある程度まで引き受けて展開されている。よって、彼の背景にある思想状況を明示化することは、件の概念の理解の助けとなるはずである。

以下、『物質と記憶』におけるこの概念の問題点を簡単に確認し（2節）、その背景にあると考えられる思想状況のうち二つ、具体的には心理学者達の観念連合に関する論争と、ベルクソンが自説の心理学的・病理学的根拠として意識していると考えられるピエール・ジャネ（Pierre Janet）の議論とを検討する（3,4節）。

2. 「意識の諸平面」概念の概要

本節では「意識の諸平面」概念について最低限のことを振り返っておく。『物質と記憶』の「出発点」となった「意識の諸平面」概念は、同書第三章後半、観念

連合説批判の中で、倒立した円錐の図を提示し、収縮 (contraction) の度合い等といった独特かつ説明の少ない用語を多く用いつつ提示されるが、それが対峙しているのは様々な観念の様々な「連合」をどう捉えるかという明確な問題であり、またそのときには具体的でありふれた事例が念頭におかれている。

私の耳に発せられたある外国語のある語は、その外国語一般のことや、かつてある仕方でその語を発音したある特定の声のことを、私に思考させることができる。(MM188)

例えばフランス語のある語が聞こえたとき、それは、音そのものとしては同じでも、語の意味理解から個人的な思い出まで、様々な思考を引き起こしうる。機械的な反応、日本語ではなくフランス語だということの確認、意味の理解と応答、その語を発していたあるフランス語の先生の声の想起、等々。「意識の諸平面」概念が提出される時例として念頭におかれているのは、このような、発せられた語を聞くという経験であり、より精確には、単なる音としては同じであってもそれが様々なことを思考させうるという経験の多様性である。

ベルクソンはこうした経験の多様性を可能にしているものとして、記憶の様々な仕方で働きに注目する。ウォルムスも指摘するように、「ここで本質的なのは、記憶そのものの多様性、とりわけその変様である。耳は、それそのものとしては、常に同じ音を聞く。知覚 (ないし脳ないし心における知覚の純然たる表象) とは異なる表象を想定すること、知覚とは異なる本性を持った記憶というものを想定することを余儀なくさせるのは、記憶が知覚そのものに加える内容の可変的な深さである」(Worms 1997, 89)。例えばある言葉を聞くという経験が持ちうる内容の様々な深みは、純粋に現代的な「知覚」だけでなく、それとは異なる源泉からの働きを考慮に入れなければ、理解できないはずである。

ベルクソンはこのようにして経験の多様性を記憶の問題に帰着させる。しかし、記憶の問題になるといっても、まず知覚 (例えば *bonjour* という音) が与えられ、それが、特定の記憶や特定の観念と連合する、と考へ、その連合はどのように行われるのかを問う、という仕方で問題にあたりはしない⁴。このように立てられた問を巡って争う立場のことをベルクソンは「連合主義」と呼び、そもそも連合を問わざるを得なくしている条件に対して批判を加えることから自らの主張を始める。即ち、連合主義は、知覚や記憶、さらには観念を、各々独立した原子のように捉えている (そのために、知覚に対する記憶内容や観念の連合が問となってし

まう)。しかし真実は、我々の記憶の全体が知覚においてつねに現前していると考えられるべきであって、経験の多様性を可能にしているものに関して問うべきなのは、連合ではなく、「意識が自らの内容の展開を抑えたり拡大したりする運動、収縮 (contraction) と膨張 (expansion) という二重の運動」(MM185) である。そして、この収縮・膨張の運動の度合に応じて想定されるのが、様々な「豊かさ」の程度を持つ「意識の諸平面」に他ならない⁵。経験の多様性を可能にするものとしての記憶の問題は、このような、意識の膨張・収縮の度合、あるいは意識が身を置く平面の多様性という概念装置を用いて立てられる。

しかし、連合主義とは全く異なる仕方でも議論されようとしているという点は理解できるとしても、不明確な点として次の二つを指摘しなければならない。1. 肝心の膨張・収縮といったタームの内実。これらに関する説明は少ない。2. 「連合主義」に対する距離。ベルクソンは、連合論者の議論が成り立つ条件である原子論的な前提を拒否していた。すると、連合主義は全面的に否定されているように見える。しかし、実際の連合主義者たちの議論を見ると、連合説として言及される議論のすべてが単純に否定されているだけではないように見える点がある。

以上二点を解消するために、意識の諸平面という概念がどのようにして形成されたのかを辿りたい。連合主義者達の議論の検討から始めよう。

3. 意識の諸平面概念の形成 1. 連合説における論争：近接が先か類似が先か

ベルクソンは観念連合説批判を展開する際いくつかの文献を指示している。ここでは心理学者達が観念連合に関する議論を戦わせているのだが、その争点は、連合の原理としての「類似」と「近接」の位置づけにある。本節では、ピロンの「抽象的一般的な観念の形成」(Pillon 1885) と題された論文を基に、その一連の論争を必要な限りで辿り、それに対するベルクソンの偏差をはかる。

ピロンの主な論敵は、ラビエやブロシャールといった、近接を唯一の連合の原理と見なす論者である。例えばラビエの論点は次の二つである。1. 類似を原理とする説明は論点先取に陥っている。なぜか。類似は、お互い類似している二つの項の間のみあり、類似は類似している二つのものがあるが初めて、それらの後に、存在する。よって、それらの項のひとつが与えられている状態において、類似は存在しない。したがって、類似が連合を可能にするとは言えない。2. では連合はどのように生じるのか。そこで持ち出されるのが、「事実上、何度か、あるいは一度でも、同時にあったないし直接継起したことのある二つの観念、要するに、

意識のうちに近接してあった二つの観念は、後でお互い示唆し合う (se suggérer) (Rabier 1884, 186) という原理である。「ABCD を現在の表象、AXYZ を過去の表象とする。前者は後者を喚起する。なぜか。それは、A が、かつて意識において A と近接してあった XYZ を喚起するからである」(Rabier 1884, 191)。連合はこのように、かつていくつかの観念 (例えば A と XYZ) が近接して知覚されたことに因って生じる。このような近接原理こそが連合を根本で支配している⁶。

しかし、これで類似に対する近接の優先性を主張できているだろうか。類似に対する上述の批判は、類似を近接に入れ替えても妥当するのではないか。実際、上述の批判と同じ論理で、近接が連合を可能にするとは言えないと主張できる。こうしてラビエらの議論を相対化し、類似と近接を巡る議論に終止符を打つには至っていないと述べるどころから、ピロンの反論は始まる。そのポイントは、「知覚された関係」と「事実上の関係」とを区別し、上述のタイプの批判が妥当するのは、関係として知覚された上で働くような関係に対してであって、関係として知覚される以前に事実上存在し働いている関係にではない、というものである。言い換えると、上述の批判が妥当するか否かを決するのは、議論の対象が類似なのか近接なのかではない。類似であれ近接であれ、それが知覚された関係だと理解されるなら、上述の批判が妥当し、連合の説明として無力である。それに対して、問題となるのが事実上存在している関係であるなら、近接であれ類似であれ、関係の知覚に先立って働いている連合の原理として、認定する余地がある⁷。

ここまでなら、近接と類似の連合原理としての優先性はどっちつかずということと終わるだろう。ピロンの反論が相対化するだけのものでなくなるのは、ラビエらが類似等の関係の知覚に先立って成り立っていないなければならないものとして主張する「近接による連合」は、それが成り立つためには、実はそれにさらに先立って、ある種の類似による連合が成り立っていないなければならない、と述べるどころからである。近接による説明を思い出そう。それは、「現在の表象 ABCD は、過去の表象 AXYZ を喚起する。なぜか。それは、A が、かつて意識において A と近接してあった XYZ を喚起するからである」というものであった。ピロンはここで、以上の議論が成り立つためには、性質 A が、現在の表象と過去の表象とにおいて同一のものと見なされていなければならないはずだということに注目する。なぜなら、もし二つの A が同一でないなら、現在の表象における A が過去における a (ピロンは二つの A を区別する際このような表記を用いる) をなぜ喚起するのかという問題がさらに生じるからである。そしてピロンは、二つの A は同一のものではないと主張することで、近接論者に対する最終的な批判を下す。

誰もが、感覚と〔過去の〕イメージとの差異を一その差異をどのように考えようと、それを本性の差異にしようとする程度の差異にしようとする。誰もが、示唆される表象の A は示唆する表象の A と、少なくとも前者は後者より弱いという点で異なっている、ということを知る。(Pillon 1885, 209)

ピロンにとって、現在の表象と過去の表象との差異がどのようなものであるのかはどうでも良い。同一でないことさえ確認できれば良いからである（彼は強さの差異以外に、同時に与えられる他の要素の差異、時間的空間的差異を挙げるが⁸、どれが本質的かという議論はしない）。それが確認されれば、そこには連合が働いているはずで、したがってその連合の説明がさらに必要となる。こうして彼は、近接が連合の原理として成り立つために必要な、現在の表象と過去の表象の間の共通の性質の同一性を否定することで、近接の原理としての不十分さを宣告する。

さて、その不十分さを補うのに必要なのは、現在の表象における A と過去の表象における a との連合の説明である。そのために彼が主張するのが、近接の連合に先立つものとしての、A と a の「類似による連合」である。ではこの連合はどのように可能となっているのか。ピロンはその問へ十分答えようとはしていない。彼は、あらゆる精神の表象から独立した自体的なものではないが、私の表象からは独立しているような類似⁹、「実在的で判明で還元不能な相似」(Pillon 1885, 207)があることを示唆しているが、それ以上は説明しない。彼自身自覚的に、この類似は、説明不能だが、事実上働いている原理として受け入れるしかないと述べる¹⁰。ピロンの議論はこのように、一旦はラビエらの議論を受け入れた上で、そこで言われる近接が働くためには、その条件として、A と a の類似による連合が働いているのでなければならないはずだ、と述べるところで終わっている¹¹。

ベルクソンに戻ろう。そこには上の議論の継承 (A) と展開 (B) を指摘できる。

(A) まず近接に関してベルクソンは、ピロンと同様の手法によって、近接が働くためには類似が働いているのでなければならないことを主張する (MM96-8, 182)。では類似に関してはどうか。ベルクソンは、類似している部分に先立つ「類似」の働きを主張していた。それは、「草食動物を引きつけるのは草一般である」

(MM177) で有名な『物質と記憶』第三章の一般観念論の帰結である。その論点は次の三つに纏めることができる。1. 知覚を「個々に異なる個的なもの＋一般観念」という構図で捉えるのではなく、知覚の第一の所与は初めからある種の一般性を備えたものとして成立している。2. よって、そうした所与が互いに持つ「類

似」は、いくつかの項を比較して初めて可能になるような「知的に認知されたないし思惟された類似」(MM179) —ピロンなら「知覚された類似」と呼ぶだろうもの一ではない。3. 問題となっている類似は、行動するものである限りでの身体が持つ感覚運動的メカニズムのみによって可能な類似であり¹²、実践的 (pratique) な関心に基づいた、「ある欲求に応じるもの」である限りでの諸対象が持つことになる類似である。ベルクソンは以上のような議論を展開する。ここで、2 はピロンらの議論と同形である。このことは単なる偶然ではないだろう。というのも、こうした議論を要請する問題が同一だからである。即ち、両者とも「類似した諸項の外延を限定するために『類似』を前提せざるを得ないという論点先取に陥る」、言い換えると、「類似は、それが複数の項を比較し抽象することで得られるものなら、どうやって比較対象が限定され喚起されるのかを説明できない限り、説明原理として有効ではない」という問題に直面し、個的な諸項の意識的な表象に先立つ「類似」の働きの必要性が要請されていたのである。

(B) ここで、ピロンら心理学者達の議論に対するベルクソンの偏差を理解できる。第一に、個的な初項の意識的な表象に先立つ関係づけの必要性という論点までは引き受けつつも、それがいかに可能となっているのかという問 (これをピロンは放棄している) を問として受け止め、身体的メカニズムが可能にする欲求ないし行動の一般性をもって応えている (前段落の3)。第二に、ベルクソンはこの応答を、現在の知覚そのものの所与の議論に限定している。

この第二の点に注目したい。現在の知覚そのものに何が含まれているのかという問は、ベルクソンにとって、知覚する身体のメカニズムは意識に何を与えることができるかと問うことに等しい。それに対して、現在の知覚に対する過去の記憶内容の介入を考慮に入れるとき、問は大きく異なってくる。周知のとおりベルクソンは、記憶を身体的機構によって説明できるとは考えないからである。そこで登場するのが、現在の知覚的所与に対する、それとは区別されるものとしての記憶の介入の様々なあり様を語る「意識の諸平面」の概念に他ならない。この概念によって初めて、本稿2節で触れたような経験の多様性が可能になる (この観点からすると、本節で述べた「類似」が可能にするのは、多様な経験のうちの極端な一ケースと位置づけられると言えることになる)。「意識の諸平面」概念の導入には、以上のような背景があると考えられる。

4. 意識の諸平面概念の形成 2. 記憶の働きと「観念」の概念について

本節では、この概念に関して、ベルクソンが意識していると考えられる心理学的理論を参照することで、彼が十分に論じていない点を理解する手がかりを得たい。まずは彼が記憶の介入の仕方をどう描いているのかを確認しておこう。

記憶の全体は、現在の状態からの呼びかけに対して、同時に生じる二つの運動によって応える。その一方は並進運動（translation）であり、それによって記憶はその全体が経験へ向かって進み、分割されることなく、行動のために様々な程度で収縮する。他方は自転運動（rotation）であり、それによって記憶はそのときの状況の方を向き、最も有用な面をそこへ提示する。（MM188）

記憶には二つの運動があると言われている。ひとつは自転運動と呼ばれるもので、これは記憶そのものの特性というよりは、それを規制する現在の身体的状況、感覚運動的メカニズムを備えた身体の働きである。それに対して並進運動と呼ばれるものは、記憶そのものの運動を記述していると思われる。今はこちらに注目したい。

現在へと介入してくる記憶の運動として、具体的にどのようなことが考えられているのか。『物質と記憶』は肝心の記憶そのものの運動をあまり説明しない。1903-4年の「記憶の諸理論の歴史」と題された講義では、次のように述べられている。

我々が記憶の働きのうちに認めるのは、二重の運動によって、過去を現在の知覚へと挿入する努力である。即ち、[一方は] 記憶の並進運動であり、記憶はそれによって前方へと進む。[他方は] 記憶の収縮の運動であり、それは、意識的な記憶内容の領野を狭め（rétrécir）、現在にとって有用なものだけが照らされるようにし、残りの全ては暗がりにとどまるようにする。（M621）

『物質と記憶』と比較して指摘すべき点が二つある。1. 「収縮」について、意識に照らされることになる記憶内容の領野を狭める運動と説明されている。2. 現在に介入する記憶そのものの運動について、過去の記憶内容が現在の内へと入り込む並進運動と、「収縮」の運動との二つが区別されて指摘されている。

この第二の点に注目したい。『物質と記憶』においてもこれら二つの運動は（その命名法は少し異なっているが）ともに指摘されていた。しかし、そこではむしろこれら二つは同じプロセスの二つの側面のように、密接に結びついているものとして扱われていた。ではこれら二つの運動、即ち過去の記憶内容が現在へと介入することと、記憶内容の展開を狭めることとの間には、どのような関係があるのか。

ところがベルクソンはそれについて特に説明しない。そこで、過去の記憶の現在への介入・影響に関して当時どのような考えが存在していたのかを明らかにすることで、その手がかりを得たい。そのために本節は、ベルクソンが記憶に関する自らの説を支持する病理学的事実としてしばしば引き合いに出す「健忘症 (amnésie)」¹³に注目し、それを症状のひとつとして含む「ヒステリー」に関する理論を打ち立てたピエール・ジャネの議論を、彼の初期の著作を対象を絞って検討する。

4. 1 健忘症という現象の特徴と記憶の保存の問題

ジャネは *L'état mental des hystérique* 第一巻において、健忘症を、人生のある一定期間に起きた出来事の記憶を失う局所的健忘症 (l'amnésie localisée)、記憶のすべてを失う全般的 (générale) 健忘症、たった今生じたことを忘れるというように、新たな記憶を形成できなくなる継続的 (continue) 健忘症、そして「ある期間に得られた記憶のすべてをではなく、あるカテゴリーの記憶、全体がひとつのシステムを形成している同じジャンルの諸観念のグループを、失う」(Janet 1893, 83) 系統的 (systématisée) 健忘症の四つに分類し、各々の症例を挙げる。例えばベルクソンも引き合いに出す系統的健忘症に関して、ジャネは次のようなケースを報告している。出産後に子供に関係したこと (夫の名前や結婚したこと) を忘れるが、それと関係ないことはよく覚えているケース、ヒステリーの発作後ジャネのことは忘れたが、他の人のことはよく覚えているケース、イギリスで過ごしたことがあって英語を話せるが、ヒステリーの発作後英語を完全に忘れてその語を発音も理解もできなくなったケース、固有名詞を忘れて皆を Marie と呼ぶケース、等 (Janet 1893, 83-5)。このように、「家族」「ある人物」「あることばのカテゴリー」といった様々なレベルで、体系的に記憶が失われるタイプの健忘症が存在する。

ところが、健忘症者の多くは、例えば催眠状態といった特殊な状態に置かれると、失われていたかに見えた記憶を取り戻す。さらに、記憶は、保存されているだけでなく、必要に応じて甦り覚醒時の行動に影響することさえある。例えば継続的健忘症に陥ったある患者で、犬にかまれた経験のある者は、無自覚的に犬を避ける。また別の患者は、他人とのおしゃべりに夢中になっている最中に担当医の名前を聞くと無意識のうちに答える。通常時に面と向かって犬の思い出や担当医の名前を聞かれても、思い出せないにもかかわらず、である (Janet 1893, 103-6)。

したがって、健忘症は記憶そのものが失われたこと意味しない。記憶は、それにアクセスできないだけで、何らかの仕方で保存されているのである。『物質と記憶』にも見られるこうした発想自体は、当時すでに新しいものではなかった¹⁴。

しかし、では記憶自体が失われたわけではないなら、健忘症患者は何を失ったのか、その保存はどのようになされるのか、そして失われずにいる記憶はどのような仕方を実効性を取り戻すのか。以下、ジャネが初期の著作において展開したヒステリー（健忘症はその症状のひとつとして含まれる）の理論を、そうした記憶の問題に関する限りで検討する。

4. 2 ジャネの「意識」の理解と、意識野の狭窄としての健忘症

健忘症とその記憶の再生とに本質的な特徴として、ジャネは次の点に注目する。即ち、記憶が失われているように見えるのは、意識が通常の状態にあり自覚的に働いているときであるのに対して、記憶が取り戻され働きを見せるのは、意識が不在のところ、「患者が反省することも自分がしていることについて人格的（personnel）な知覚を持つこともなく、何にも気づかず、質問に対して観念の機械的な連合によって自動的に答える」（Janet 1893, 109-10）場合である、という点である。ある別の意識が、通常意識とは独立に存在し、知らないうちに知的とも言える行動をとる。この現象は人格の二重化（*dédoublement*）・分裂（*scission*）・統合不全ないし解離（*désagrégation*）等と呼ばれ、様々なヒステリーの観察を重ねたジャネにとって、解明すべき問題として馴染みのものであった。健忘症の他に、「後催眠現象」¹⁵のような、通常意識と平行して、もうひとつの意識が知らない内に働きを見せるケースも知られている。ジャネは、このような「別の意識」を「下意識（*subconscience*）」と呼び、その存在によって、健忘症を含むヒステリーの多彩な諸症状を統一的に理解できると考える。ではそのとき、我々の「意識」とはどのようなものとして理解されなければならないということになるのか。

彼によると、心理学的生を構成しているのは、一つの方向へのびる鎖のような、継起する一連の現象ではなく、互いにある程度独立した多様な諸要素である。そこでは感覚や過去のイメージが相互にぶつかり合いながら一群の群れをなしており、いわゆる人格の「一性」は精神によるそれらの「統合」ないし「体系化」の結果にすぎない¹⁶。こうした統合によって可能となる「ひとつの意識」を、ジャネは「意識野」と呼ぶ。そして、過大なショック等で精神のこの統合の能力が減弱すると、心的諸要素の内の一部がひとつの意識へと統合されなくなり、意識野は狭窄（*rétrécir*）する。この「意識野の狭窄」こそが、ヒステリーの諸症状に共通して当てはめうるものとしてジャネが提示する理論である。

要素的な心理学的諸現象は、このうえなく正常な人においても実在的で無数

に存在しているが、[ヒステリーにおいては] 統合能力の際立った減弱のせいで、ひとつの同じ知覚、ひとつの同じ人格的意識へと纏められることができない。(Janet [1889] 2005, 364)

意識野の狭窄によって、通常はひとつに統合されている心的諸要素の一部が乖離し、それは存続しているものの意識がアクセスできないものとなる。そうした一部は、単にバラバラの状態で眠っているのではなく、それらはそれらで明晰な意識から独立した「第二のグループ、気づかれない心理学的諸現象の二次的な体系化」(Janet 1894, 278)を形成し、明晰な意識の知らないところで体を動かしたり質問に答えたりする。ジャネはこのようにして、通常感じられる意識の「一性」は簡単に崩れうるものであり、それは自明では全くないこと、むしろその下に蠢いている心的要素の多様性こそ「意識」というものの基盤であると主張している。

健忘症において失われていたのはまさに心的な統合の能力であり、失われていたかに見えた記憶は通常意識とは別の下意識において、独立して保存されていたと考えられている¹⁷。ジャネによる、ヒステリーの理論とそれに基づく健忘症の理解は、以上のようにして纏められる。では、それはどのような多様なのか、そしてそのとき、観念の連合として語られることがあるような「過去の記憶の現在に対する介入」はどう理解できるのだろうか。

4. 3 自動的に展開するものとしての観念、記憶の実効化と現実性

まず注目すべきは、ジャネにとって、観念が別の観念と結びつき展開していくために、意識的な働きかけは不要であるという点である。というのも、先述のように、彼が観察する人々は、明晰な意識を欠いたまま、しかし規則的な仕方で、体を動かしたり質問に答えたりしているからである。観念そのものに、様々な複雑さの程度において自ら展開していく力が認められなければならない。これこそが、ジャネの最初の著作のテーマとなる自動症 (automatisme) である。

その典型的な事例として、カタレプシー状態(受動的にある姿勢をとらせると、それが窮屈であっても自発的に抵抗しないこと。例えば腕を持ち上げられると、その姿勢を保持し続ける)に陥りやすいレオニーと呼ばれる女性は、単に同じ姿勢のまま動かないだけでなく、同じ順序で身体的運動を展開することがある。彼女の拳を握らせると、腕を上げて攻撃的な姿勢をとり、表情も険しくなるが、彼女の手を唇に当てさせて投げキスをするポーズをとらせると、表情は和らぎ微笑みを浮かべる。音楽を聴かせると、曲調に合わせて表情を変化させる。祈りの姿

勢をとらせると、立ち上がって数歩進み、跪き、頭を垂れる（聖体拝領の動作）。このように、ある姿勢が、それと結びつく別の身体的動作へと規則的に展開されている様子が観察される¹⁸。ここで注目したいのは、この展開が外界との関わりなしに機械のように行われるという点である。聖体拝領の動作の途中で壁に当たっても、横にそれたりすることなく壁を押し続ける（cf. Janet [1889] 2005, 203）。また、彼女に老女や王女等であるという暗示をかけ、成功すると、様々な複雑さの程度でそのように振る舞う。老女になったときは咳をし呻き声をあげる程度だが、王女になったときには、「ドレスを厳かに長椅子の上に広げ、想像上の扇をはためかせ、宮廷や自分の土地や無礼な公爵達についておしゃべりする」（Janet [1889] 2005, 162）といった比較的複雑な振る舞いをする。あるいは、「目の前に羊がいる」と言って放っておくと、毛並みや鳴き声といった細部を次第に感じるようになり、ついには「本当の羊がいる」と述べるに至る（Janet [1889] 2005, 182）。あたかも、自分の周囲の状況や衣服についての感覚、及び自分が本当は農婦であるという記憶とは無関係に、「羊」や「王女」の観念だけが展開しているかのようである。

こうして、カタレプシーは意識野の狭窄の極端な一例とみなせる。意識野が極端に狭窄し、聖体拝領や羊や王女の観念以外の要素、部屋や自分の服や過去に関する観念が意識に統合されていない。さて、この点を確認した上でさらに注目したいのは、意識野の狭窄と観念の「連合」との関係である。ジャネはレオニーの他にも、彼女ほど極端ではないにせよ同様の事例を複数観察し、そこから、意識野が狭窄するほど観念が自動的に展開していく傾向が強まることを指摘する。

被験者の精神の内には、王女や大司教に関するある何らかの観念がかつて形成されており、その観念は、言葉によって喚起され、それ自身に身を委ねられることで、存続し、その観念が含み込んでいる諸要素を行動や幻覚という形で我々に示しているのである。というのも、狭まっている精神においては、その際、他のどんな知覚が形成され、暗示された観念 (*idée suggérée*) に抵抗する、ということもないからである。（Janet [1889] 2005, 202）

通常であれば、王女であるとか羊がいるなどと言われたり、何らかの姿勢をとられても、それを信じたり、その姿勢に続く動作（それがどれほど身に染み付いた習慣の最初の姿勢であっても）を行ったりするとは限らない。それは、現在の自分の状況に関する様々な観念、感覚や記憶が、それに抵抗しその展開を修正す

るからである。それに対して、意識野の狭窄した状態にある者にとって、与えられたある感覚や暗示されたある観念に矛盾するような感覚や記憶は、あったとしてもアクセス不能なままであり、そのことによって、暗示された観念にかつて結びつけられたことがあり下意識として記憶されている一連の観念が、他の観念にぶつかり規制・修正されることなく自動的に展開し、他人からすれば錯覚や芝居と映るような振る舞いとして表出される。記憶はこのように、意識の働きかけから独立に自ら展開し、実効性を獲得する力を持っている。前節でふれた意識の基盤となる多様性とは、このような、各々が展開する力を持ち競合し合っている様々な観念の多様性であり、意識野の狭窄において低下している統合能力とは、対立するそうした様々な観念を一つの意識に同時的に併存させる能力に他ならない。

ここで見誤ってはならないのは、ジャンネの考えでは、意識野の狭窄による「錯覚」や「芝居」は、狭窄状態にある当人にとってはまぎれもない現実であるという点である。もちろん、彼らは言われたことを何でもすぐに現実とみなすわけではない。羊や王女の観念を（例えば言葉で）示すだけでなく、記憶の中でそれに伴っている様々な他の観念が次々展開されるのを待たなければならない。尻尾があり、白い毛並みが見え…等と告げ、最初の観念を補完する諸観念を喚起することが有効なこともある。こうして複雑な細部を伴うことで、抽象的でしかない観念が現実となり、実効的なイメージや運動を引き起こす。「イメージの複雑性がその現実性を生み出すのである」(Janet [1889] 2005, 182)。したがって、先述の「観念の展開」とは、単なる空想や抽象観念の連合ではない。観念が、初めは現実に対して中立的であっても、何らかの上位の能力の介入なしに、自ら現実的な感覚や実際の運動を引き起こすに至るまで展開するものとして捉えられている。

もちろん我々は、普段、羊を見ることなく思い浮かべたり、ある行動を実際に行うことなく考えたりすることができるが、それは我々が、羊やある行動の観念を、現在の状況に関する感覚と同時に、しかしそれとは対立するものとして、保持できるからに他ならない。現在の知覚との統合が、暗示された観念の自動的な展開を妨げるのである。そのとき、自動的に展開する諸観念の力と、それらを現在の感覚へと統合する能力とが、相互に規制し合っていることになる¹⁹。記憶がいかに実効性を獲得しいわゆる観念連合を成立させるのかという問題は、ジャンネにおいては、このような二つの働きの規制の仕方の問題となるのである。

5. 結論

以上、足早にジャンネの理論を確認し、そこから記憶と観念の働きに関する問題を取り出した。直ちにベルクソンとの親近性にいくつか気づかされる。1. 記憶は、意識的な働きかけから独立に、それ自身様々な仕方で体系化され展開する力を持っていると見なされており、心的生はそうした力を持った多様性からなっている。2. それらの展開の力とは現実化への力でもあり、現実化されやすさと意識の領域の広がりとの間には相関関係がある。3. いわゆる観念連合は、記憶のそうした力と現在の感覚との相互規制の問題として扱われなければならない。もちろんベルクソンであれば、「人格の一性」を揺るがす議論や、現実性を単なるイメージ及び観念の複雑さとする議論には反対するだろう。また、後年のジャンネによるベルクソンへの批判も、両者の対決を十全に見届けるには考慮に入れる必要がある。しかし本稿では、「膨張・収縮」や「平面の広さ」といった仕方で記憶の介入のあり様を語る「意識の諸平面」概念は、このような観念連合を巡る心理学的な議論に理解の手がかりを求められることを示したことで、閉じることにしたい。

本稿は科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

¹ 最初の序文は、*Œuvres*, 1490-1、およびウォルムスを中心に大量の編者注を付されて刊行された版の付録（MM444-5）におさめられている。

² ここで「心的生の異なる調子」「異なる高さ」と表現されているのが、意識の多様な平面、「意識の諸平面」の仮説に他ならない。

³ 『物質と記憶』内の他の議論に対するこの概念の関係については Worms (1997) 参照。

⁴ MM113-4, 135-6, 148-9, 184-5 参照。

⁵ MM188 参照。

⁶ これの他に、一度なされたことと同じことを反復しようとする習慣や、習慣に対する脳の生理学的説明（以前と同じ経路での脳の振動の通過は、他の経路での通過に比べ、より容易になる）が引き合いに出されるが、これに対してもピロンは、以下述べるのと同様、相対化するような仕方での反論を加える（cf. Pillon (1885, 202)）。

⁷ Pillon (1885, 195) 参照。

⁸ Pillon (1885, 209-10) 参照。

⁹ Pillon (1885, 196-7) 参照。

¹⁰ Pillon (1885, 197) 参照。

¹¹ 類似に関して何が考えられなければならないかという問題はピロン以外にも共通して見られる。例えば J. サリーは、当時の心理学や生理学の見解を踏まえつつ、心に関する一群の現象の包括的な記述を試みるなかで、近接と類似を共に連合の還元不能な原理として認めた上で、類似は、近接のようにかつて一緒に知覚されたことも、類似として意識的に関係付けられることも必要とすることなく働きうることから、類似に関して語るべきは「類似による連合ではなく、類似したものどもの相互の示唆あるいは『類似したものどもの引力 (attraction)』である」(Sully 1892, 331) と述べ、「類似による [過去の表象の] 再生は、諸表象の心理学的 (ないし心理生理学的) 関係によって [表象に] 内在的に条件づけられている」(Sully, 1892, 334) と考えるべきだと主張する。ここでも、諸項の意識的な関係づけに先だって働く「類似」が要請されている。

¹² MM175-80 参照。ベルクソンはこの類似を「自動的に演じられた類似」(MM179) 等と呼ぶ。

¹³ 『物質と記憶』では「系統的健忘症」(MM189) と「逆行性健忘症 (amnésie rétrograde)」(MM191)

が、また先ほど引いた 1903-4 年の「記憶の諸理論の歴史」講義では、有名な Félicité と呼ばれる患者の健忘症が、それぞれ引き合いに出されている。逆行性健忘症とは、発作や事故に先立つ（即ち正常であった）一定期間の記憶が失われる症状（例えば馬に蹴られる事故にあった人が、事故後のことだけでなく、事故前の一定期間に起きたこと、それも些細なことではなく大金の受け取りのような当人にとって重大なことをも忘れるというような症状）であり、アザンがいくつかの例を纏めて報告している（Azam 1881, 137-40, 307-8）他、シャルコーはこの健忘症を見かけ上のものではなく、「無意識」において保存されていることを示しており（Charcot 1892, 83-5, 93）、ジャネはさらに、忘れられているかに見える出来事は、単に保存されているだけでなく、「下意識」において他の出来事の記憶と結びつき、当の健忘症の範囲を左右するよう働いているとの説を提示する（Janet 1893, 114-6）。また、Félicité と呼ばれる患者は、アザンによって観察され、人格の二重性の事例として様々な考察が行われてきた女性である。彼女はある時期から、陰鬱な人格と開放的な人格という異なる二つの人格を呈するようになった。その特徴は、陰鬱な方の人格はもう一方の人格において経験されたことの記憶を有していないが、逆は有しているという点にある。これに関するベルクソンの考察としては M853-4, 1228-30 参照。

¹⁴ 本稿註 13 参照。

¹⁵ Janet ([1889] 2005, 255-69) 参照。例えば次のような事例がある。催眠状態で「13 日後に診察所に来る」という暗示をかけられた被験者が、催眠から覚めた後、暗示のことを思い出さずそのまま通常の生活を送り、13 日後、特別な理由も分からないまま診察所に来る。通常意識とは独立の下意識が、13 日間を教え、診察所へ行くという行動を引き起こさせたかのように事が生じている。ここで重要なのは、暗示行動を引き起こすのが与えられる刺激そのものではなく、13 日を数えるという知的な働きであるという点、そしてそれが当人の意識とは独立に、知らないうちに、即ち「下意識」において、行われている、という点である (cf. 杉山 (2013, 196))。

¹⁶ Janet (1894, 275) 参照。

¹⁷ Janet (1893, 108, 111) 参照。

¹⁸ Janet ([1889] 2005, 13-21) 参照。

¹⁹ Janet, Préface de la deuxième édition de *L'automatisme psychologique*, in Nicolas (2005), 59 参照。

[参考文献]

- Azam, Eugène. 1881. “Les troubles intellectuels provoqués par les traumatismes cérébraux,” *Archives générales de médecine*, février, 1881, 129-50, 291-315.
- Bergson, Henri. 1896. *Matière et mémoire*, «Quadriges», PUF. (MM)
- . 1959. *Œuvres*, PUF.
- . 1972. *Mélanges*, PUF. (M)
- Charcot, Jean M. 1892. “Sur un cas d’amnésie rétro-antérograde probablement d’origine hystérique”, *Revue de médecine*, douzième année, 1892, 81-96.
- Janet, Pierre. (1889) 2005. *L'automatisme psychologique*, L'Harmattan.
- . 1893. *L'état mental des hystériques*, t. 1, Harmattan
- . 1894. *L'état mental des hystériques*, t. 2, Harmattan
- Nicolas, Serge. 2005. « Introduction », in Janet ([1889] 2005).
- Pillon, François. 1885. “La formation des idées abstraites et generals,” *Critique philosophique*, 1885, G Baillière, t. 1, 118-33, 178-215.
- Rabier, Élie. 1884. *Leçons de philosophie*, t. 1, Psychologie, Hachette.
- Sully, James. 1892. *The human mind: a text-book of psychology*, vol. 1, Longmans & co.
- Theau, Jean. 1968. *La critique bergsonienne du concept*, PUF.
- Worms, Frédéric. 1997. “La théorie bergsonienne des plans de conscience,” *Bergson et les neurosciences*, Empecheurs Penser en Rond.
- 杉山直樹. 2013. 「意識の他者／他者の意識」, 『思想』, 岩波書店, 2013 年 4 月, 181-206.